

「日本の古代山城について - 城内平坦地面積からの一考察 - 」
菅 優也

古代山城とは、近畿・瀬戸内・九州北部の各地に点在する古代の城郭遺跡である。一般的に、『日本書紀』『続日本紀』などの史書に記載されているものを「朝鮮式山城」と呼び、記載されていないものは「神籠石」と呼ばれている。「朝鮮式山城」は、663 年の「白村江の戦い」に敗れた大和朝廷が唐・新羅軍の侵攻に備えるため、亡命百済人の技術によって造られたことが知られている。一方、「神籠石」は、文献に記載されていないため築城経緯や目的など不明確な点が多い。これら古代山城遺跡には大きく 2 つの特徴があるように思われる。第一の特徴として、土塁・石塁・列石・水門・城門など多くの遺構が外郭線部分に集中していることが挙げられる。そのため、外郭線内部すなわち城内部分は未調査な遺跡が多い。城内の礎石群が発見され、発掘調査もされている城もあるが、大野城・鞠智城など数城にとどまっている。第二の特徴として、古代山城の立地している地形が挙げられる。古代山城は近世城郭をも上回る広大な面積を占有しているが、立地している地形が山岳であるため、城内のほとんどが生活や戦闘行為に不適切な山の傾斜面である。以上のことから、本論では、城内の有効に使用できる平坦地を求めれば、今日まで不明とされてきた城内部分の多少の解明や、今までとは違

う観点からこの遺跡の特徴づけを行えるのではないかと思います。検討を行った。

27 箇所ある古代山城遺跡の内、城内の平坦地面積を測定できる遺跡は、大廻小廻山城・鬼城山城・石城山城・城山城（香川県）・永納山城・御所ヶ谷城・鹿毛馬城・大野城・金田城・杷木城・高良山城・女山城・基肄城・帯隈山城・おつぼ山城の計 15 城である。

総面積と平坦地面積の比較では、総面積が大きいと平坦地面積も大きく、また総面積が標準的であれば、平坦地面積も標準的な範囲に収まる傾向があった。平坦地面積が総面積に占める割合を見ると、多くの遺跡が 10% 前後の位置に集中していた。このことから、一定の面積を得るように山を囲繞するという、城が立地する具体的な地形の共通性がうかがえた。外郭線と平坦地との関係では、多くの遺跡の数値が 10000 m² 付近に集中した。大野城や城山城などの大規模な城を除く一般的な城は、同程度の軍事的価値を持っていると考えられた。平坦地面積と収容人員の推察平坦地面積からその城が収容できる人員を見ると、大野城は 25200 人、城山城は 17800 人とかなりの人員を収容でき、少ない城でも 1000 人程度は収容できると推定された。また、九州北部を中心に古代山城と兵士数について検討すると、収容人員が兵士数を大幅に上回っており、城内には兵士以外にも多数の人々が収容できたと考えられた。

以上の考察から導き出される結論としては、一部の例外を除く古代山城の共通性や求心性である。このことはすなわち古代山城は同時期に同一者（組織）によって同一目的のために築城されたことを意味している。そして「663 年以降に大和朝廷が大陸からの侵攻軍に備えて築城した」という「朝鮮式山城」の説明が古代山城全般にも当てはめられるのではないかと考えた。